

平成24年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

調査目的・方法等

調査目的：文化庁が平成7年度から毎年実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。

調査対象：全国16歳以上の男女

調査時期：平成25年3月

調査方法：一般社団法人中央調査社に委託し個別面接調査を実施

回収結果：調査対象総数 3, 5 2 3 人
有効回収数（率） 2, 1 5 3 人（61.1%）

目 次

1. 人とのコミュニケーションについて	
誰かの話を聞いていて、その人の言いたかったことと、自分の受け取ったこととが食い違っていたという経験があるか、ないか <問1>	3
【「ある(計)へ】相手の言いたいことを理解できなかった理由 <問1付>	3
誰かに話をしている、自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかったという経験があるか、ないか <問2>	4
【「ある(計)へ】自分の言いたいことが伝わらなかった理由 <問2付>	4
人とのコミュニケーションにおいて、難しいと感じること <問3>	5
人とのコミュニケーションにおいて、重視すること <問4>	6
誰かと話をするとき、相手から不快感を覚えるのはどのようなことか <問5>	7
2. 外来語や外国語などのカタカナ語の使用について	
日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に、外来語や外国語などのカタカナ語を使っている場合が多いと感じるか <問6>	8
日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に出てくる外来語や外国語などのカタカナ語の意味が分からずに困ることがあるか <問7>	9
日常生活の中で、外来語や外国語などのカタカナ語を交えて話したり書いたりしていることを好ましいと感じるか <問8>	9
3. 国語に関わる知識や能力についての課題	
社会全般の国語に関わる知識や能力には、どのような課題があるか <問9>	10
自分自身の国語に関わる知識や能力には、どのような課題があるか <問10>	10
4. 文字の手書きについて	
ふだん、手書きで文字を書く方か <問11>	11
5. 手紙の作法について	
今後、手紙の作法はどうあるべきだと思うか <問12>	12
6. 言葉の意味や使い方が分からないときにどうするか	
言葉遣いに迷ったり、言葉の意味や使い方が分からなかったりしたときに、どのようにしているか <問13>	14
7. 同訓の漢字の使い方について	
文章を書くときに、漢字の選び方で迷うことがあるか、それとも、ないか <問14>	15
漢字に直すとしたらどれを使うか <問15>	15
8. 五つの言い方の認知と使用	
「きんきんに冷えた」「サクサク動く」など五つの言い方を聞いたことがあるか、また、使うことがあるか <問16及び問16付>	17
9. 言葉の意味	
どちらの意味だと思うか <問17>	19
10. 慣用句の言い方	
どちらの言い方を使うか <問18>	22

1. 人とのコミュニケーションについて

誰かの話を聞いていて、その人の言いたかったことと、自分の受け取ったこととが食い違っていたという経験があるか、ないか <問1> (P.3*)
 — 6割台半ばの人が「ある(計)」と回答 —

* 報告書のページを表す。

〔全体・年齢別〕

誰かの話を聞いていて、その人の言いたかったことと、自分の受け取ったこととが食い違っていたという経験があるか、それとも、ないかを尋ねた。

「よくある」と「時々ある」を選んだ人を合わせた「ある(計)」は66.5%、「余りない」と「ない」を合わせた「ない(計)」は33.3%であった。

年齢別に見ると、「ある(計)」の割合は、20代以下で8割前後となっている。また、30～50代では7割前後、60歳以上では、約6割となっている。

(数字は%)

	よくある	時々ある	ある(計)	余りない	ない	ない(計)	分からない
全体	9.2	57.2	66.5	26.8	6.5	33.3	0.2
16～19歳	6.8	74.3	81.1	14.9	4.1	18.9	—
20代	12.6	65.1	77.7	20.6	1.7	22.3	—
30代	5.8	65.3	71.1	26.1	2.7	28.9	—
40代	4.6	64.5	69.1	26.6	4.0	30.6	0.3
50代	10.5	59.8	70.3	24.8	5.0	29.7	—
60歳以上	11.0	48.7	59.7	29.8	10.1	39.9	0.4

相手の言いたいことを理解できなかった理由 <問1付> (P.3)

— 20代以下の年代で「自分の聞き方に問題がある」と考える人が他の年代より多い —

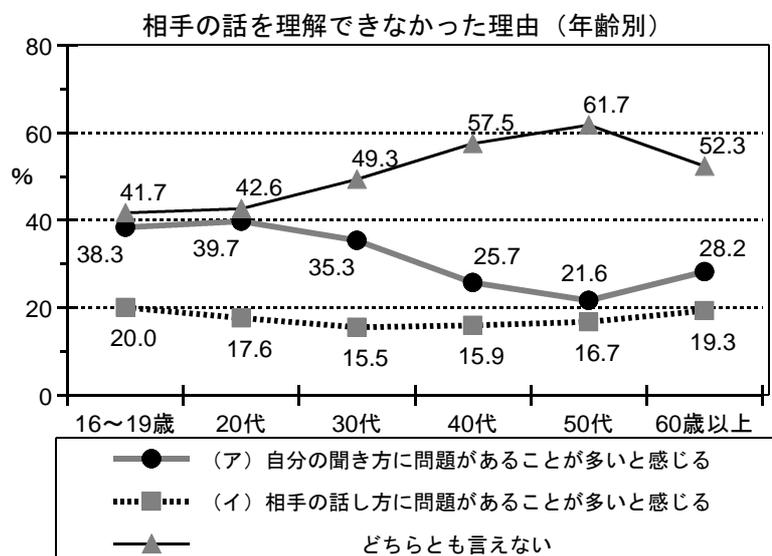
〔全体〕

問1で「ある(計)」を選択した人(66.5%)に、食い違った理由を尋ねた。結果は以下のとおり。

- ・ どちらかと言えば、自分の聞き方に問題があることが多いと感じる… 29.3%
- ・ どちらかと言えば、相手の話し方に問題があることが多いと感じる… 17.7%
- ・ どちらとも言えない… 52.8%
- ・ 分からない… 0.2%

〔年齢別〕

年齢別に見ると、右のグラフのとおり。全ての年代で、「どちらとも言えない」と回答した人の割合が最も高い。20代以下の年代では、「どちらかと言えば、自分の聞き方に問題があることが多いと感じる」と回答した人が4割弱となっており、他の年代に比べて高くなっている。



誰かに話をしている、自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかったという経験があるか、ないか <問2> (P.7)

— 6割以上の方が「ある(計)」と回答 —

〔全体・年齢別〕

誰かに話をしている、自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかったという経験があるか、それとも、ないかを尋ねた。

「よくある」と「時々ある」を選んだ人を合わせた「ある(計)」は63.4%、「余りない」と「ない」を合わせた「ない(計)」は36.3%であった。

年齢別に見ると、「ある(計)」の割合は、16歳から50代までは、6割台半ばから7割前後となっている。また、60歳以上では、5割台半ばとなっている。

(数字は%)

	よくある	時々ある	ある(計)	余りない	ない	ない(計)	分からない
全体	11.7	51.8	63.4	28.9	7.4	36.3	0.2
16~19歳	18.9	50.0	68.9	27.0	4.1	31.1	—
20代	15.4	54.9	70.3	24.6	5.1	29.7	—
30代	13.4	57.7	71.1	26.1	2.7	28.9	—
40代	7.3	59.3	66.7	29.4	4.0	33.3	—
50代	10.5	58.2	68.7	25.4	5.9	31.3	—
60歳以上	11.7	44.9	56.6	31.8	11.1	42.9	0.5

自分の言いたいことが伝わらなかった理由 <問2付> (P.7)

— 「自分の話し方に問題がある」と考える人の割合は、若い年代で高い傾向 —

〔全体〕

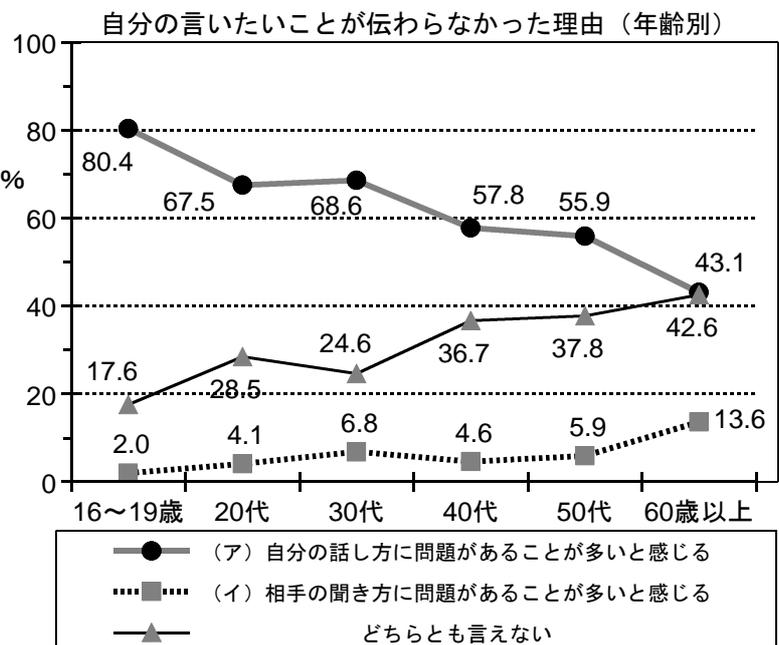
問2で「ある(計)」を選択した人(63.4%)に、伝わらなかった理由を尋ねた。結果は以下のとおり。

- ・どちらかと言えば、自分の話し方に問題があることが多いと感じる… 55.0%
- ・どちらかと言えば、相手の聞き方に問題があることが多いと感じる… 8.6%
- ・どちらとも言えない… 35.9%
- ・分からない… 0.5%

〔年齢別〕

年齢別に見ると、右のグラフのとおり。全ての年代で、「どちらかと言えば、自分の話し方に問題があることが多いと感じる」と回答した人の割合が最も高くなっている。中でも、16~19歳では8割、20~30代では6割台後半となっており、40代以上に比べて高くなっている。

一方、「どちらかと言えば、相手の聞き方に問題があることが多いと感じる」と回答した人は、60歳以上を除く全ての年代で1割に達していない。



人とのコミュニケーションにおいて、難しいと感じること <問3> (P.11)

— 4割の人が「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答 —

〔全体〕

人とのコミュニケーションにおいて、「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」のどちらが難しいと感じるかを尋ねた。

「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答した人が4割強、「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」と回答した人が3割台半ばという結果であった。また、「相手や状況によって異なるので、どちらとも言えない」と回答した人が1割台後半であった。

・「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」の方が難しい……………	40.5%
・「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」の方が難しい……………	34.4%
・相手や状況によって異なるので、どちらとも言えない……………	17.9%
・どちらにも難しさを感じない……………	5.6%
・分からない……………	1.7%

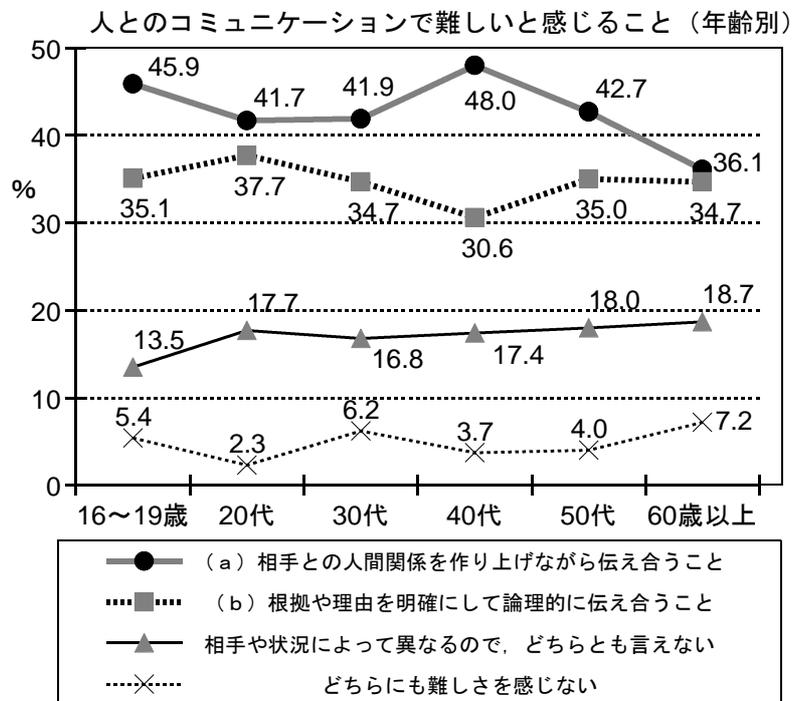
〔年齢別〕

年齢別に見ると、右のグラフのとおり。

全ての年代で「(a) 相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」を難しいと感じる人の割合が高くなっている。特に、40代では4割台後半となっており、他の年代に比べ高い。一方、60歳以上では、3割台半ばとなっており、他の年代に比べ低くなっている。

また、「(b) 根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」を難しいと感じる人の割合は、全ての年代で3割台となっている。

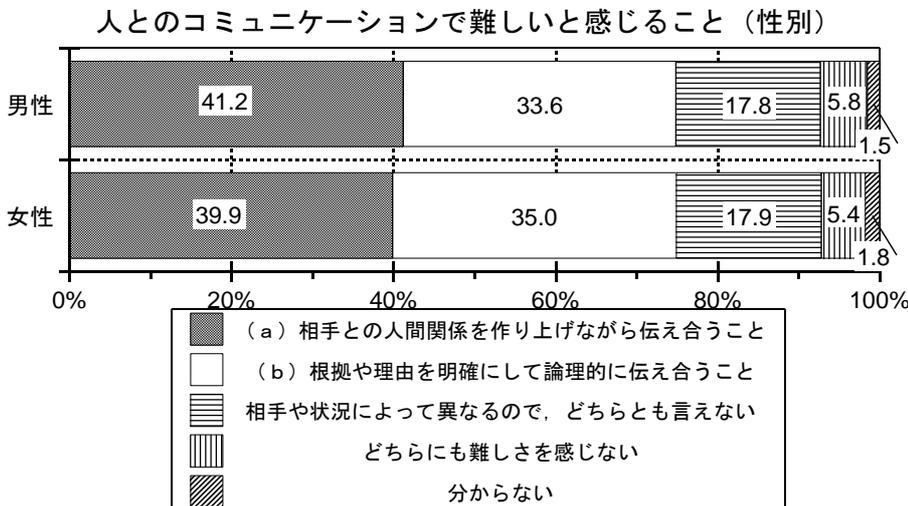
なお、「どちらにも難しさを感じない」を選んだ人の割合は、どの年代でも1割に達していないが、中でも20代では2.3%と、他の年代に比べて低くなっている。



〔性別〕

性別に見ると、左のグラフのとおり。

男女間で、大きな差はない。



人とのコミュニケーションにおいて、重視すること <問4> (P.13)

— 6割台半ばの人が「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答 —

〔全体〕

人とのコミュニケーションにおいて、「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」のどちらを重視するかを尋ねた。

「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答した人が6割台半ば、「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」と回答した人が1割台半ばという結果であった。また、「相手や状況によって異なるので、どちらか一つには絞れない」と回答した人も1割台半ばであった。

・「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」の方を重視する	65.1%
・「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」の方を重視する	15.0%
・相手や状況によって異なるので、どちらか一つには絞れない	14.9%
・どちらも重視していない	3.7%
・分からない	1.4%

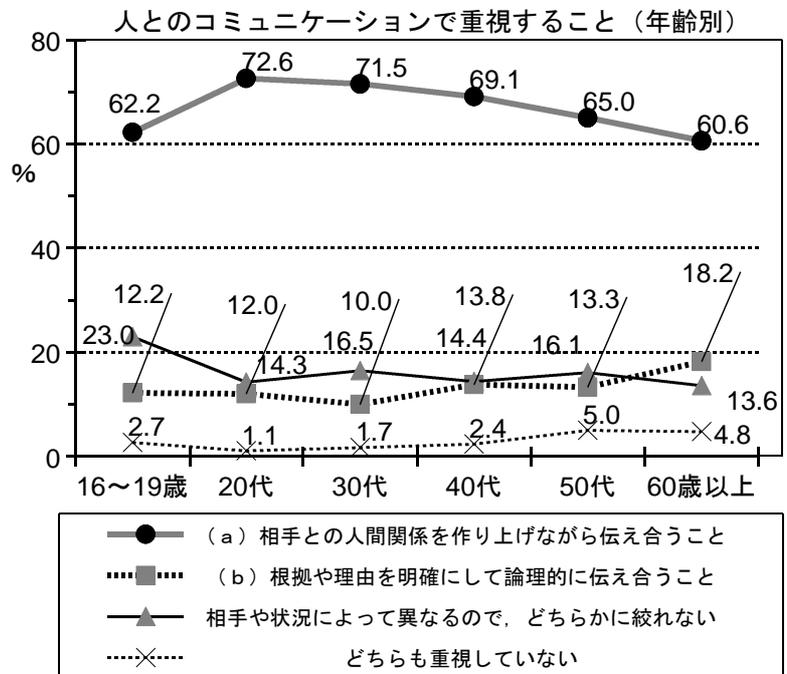
〔年齢別〕

年齢別に見ると、右のグラフのとおり。

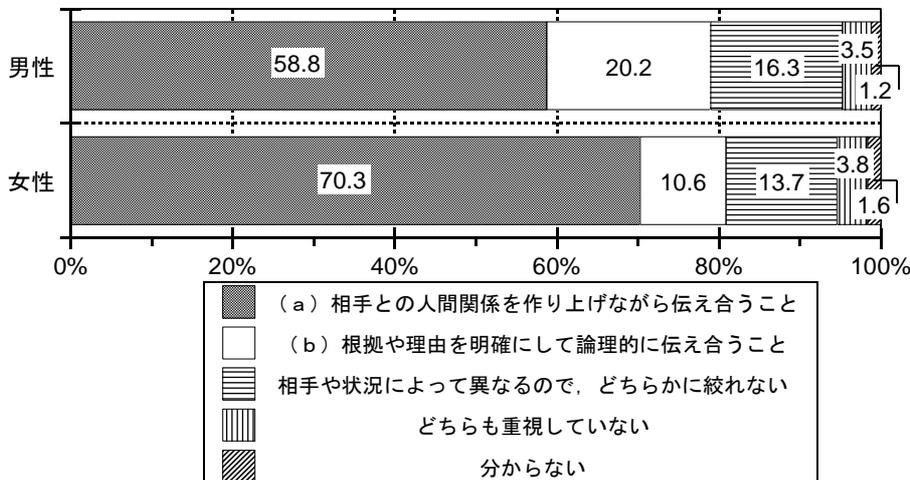
全ての年代で「(a) 相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」を重視すると答えた人の割合が高くなっていく。特に、20代から40代では7割前後となっており、他の年代に比べて高い。

また、「(b) 根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」を重視していると答えた人の割合はどの年代でも1割台となっている。そのうち、60歳以上では、18.2%となっており、他の年代に比べて高い。

なお「相手や状況によって異なるので、どちらか一つには絞れない」と回答した人の割合は、16～19歳で2割台前半となっており、他の年代に比べて高い。



人とのコミュニケーションで重視すること (性別)



〔性別〕

性別に見ると、左のグラフのとおり。

「(a) 相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」を選んだ人の割合は、女性 (70.3%)の方が男性 (58.8%)より12ポイント高い。

一方、「(b) 根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」を選んだ人の割合は、男性 (20.2%)の方が女性 (10.6%)より10ポイント高い。

誰かと話をするときに、相手から不快感を覚えるのはどのようなことか <問5> (P.15)

— 男性は「敬語の使い方など言葉遣いに問題がある」、女性は「相手ばかりが話している」が多い —

〔全体・性別〕

誰かと話をするときに、相手から不快感を覚えるのはどのようなことかを尋ねた（選択肢の中から三つまで選択）。

全体では、「話したり聞いたりするときの態度が悪い」（32.3%）、「話が理解されず会話がかみ合わない」（32.2%）、「相手ばかりが話している」（31.0%）を選んだ人の割合が3割を超え、他に比べて高い。続いて「敬語の使い方など言葉遣いに問題がある」（29.8%）「言葉や態度の裏に、隠された意図を感じる」（28.5%）が3割弱となっている。

性別に見ると、男性で最も割合の高かったのは「敬語の使い方など言葉遣いに問題がある」（33.5%）、女性では「相手ばかりが話している」（33.1%）であった。また、男性の方が女性よりも「話の組立てや流れに問題がある」で8ポイント、「敬語の使い方など言葉遣いに問題がある」で7ポイント高くなっており、女性の方が男性よりも「相手ばかりが話している」と「言葉や態度の裏に、隠された意図を感じる」で5ポイント高くなっている。

	全 体	男 性	女 性
・話したり聞いたりするときの態度が悪い……………	32.3%	32.9%	31.8%
・話が理解されず会話がかみ合わない……………	32.2%	31.4%	32.9%
・相手ばかりが話している……………	31.0%	28.6%	33.1%
・敬語の使い方など言葉遣いに問題がある……………	29.8%	33.5%	26.7%
・言葉や態度の裏に、隠された意図を感じる……………	28.5%	25.9%	30.7%
・話の内容に問題がある……………	21.3%	23.0%	20.0%
・視線を合わせようとしない……………	17.9%	17.1%	18.6%
・話の組立てや流れに問題がある……………	13.7%	18.0%	10.0%
・話す速さに問題がある……………	12.4%	14.5%	10.7%
・声の質や大きさに問題がある……………	10.5%	10.0%	10.9%
・相手が余り話さない……………	9.0%	8.3%	9.6%
・不快に感じることはほとんどない……………	8.5%	6.9%	9.9%

〔年齢別〕

年齢別に見て、年代間の差が比較的大きい5項目について見ると、右のグラフのとおり。

「話したり聞いたりするときの態度が悪い」は、20代から40代で選択した人の割合が4割台半ばから5割台後半と、他の年代と比べて高いが、一方、60歳以上では1割台半ばとなっている。

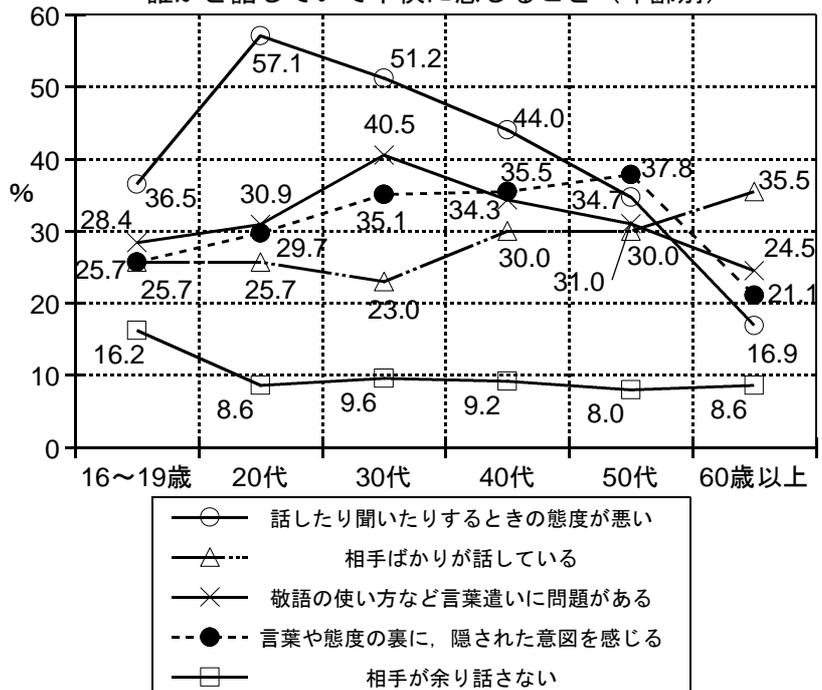
「相手ばかりが話している」は60歳以上で3割台半ばと、他の年代に比べて高い。

「敬語の使い方など言葉遣いに問題がある」は30代で4割、40代で3割台半ばと、他の年代に比べて高い。

「言葉や態度の裏に、隠された意図を感じる」は、30代から50代で3割台半ばから3割台後半と、他の年代に比べて高いが、一方、60歳以上では2割強となっている。

「相手が余り話さない」は16～19歳で1割台半ばと、他の年代に比べて高い。

誰かと話していて不快に感じること（年齢別）



2. 外来語や外国語などのカタカナ語の使用について

日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に、外来語や外国語などのカタカナ語を使っている場合が多いと感じるか <問6> (P.18)

— 「多いと感じることがある(計)」は、平成19年度調査から12ポイント減少 —

〔全体・過去の調査との比較〕

日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に、外来語や外国語などのカタカナ語を使っている場合が多いと感じることが、よくあるか、たまにあるか、それとも、ないかを尋ねた。

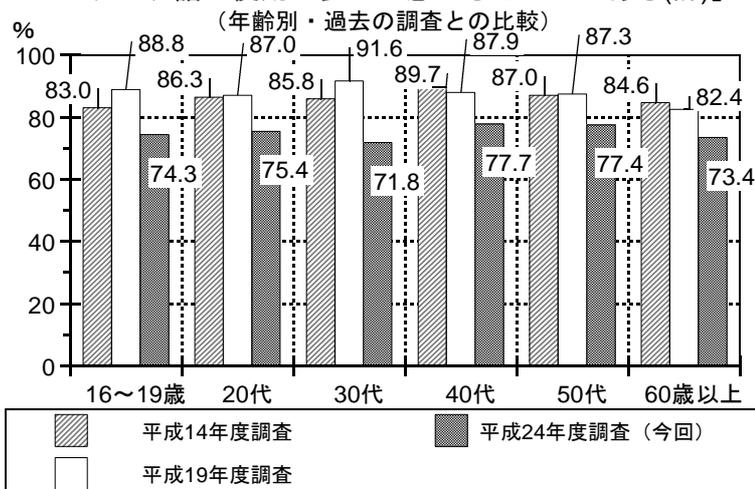
「よくある」(42.5%)と「たまにはある」(32.2%)を合わせた「ある(計)」は7割台半ばであった。一方、「多いと感じることはない」と答えた人は2割台半ばであった。

過去の調査結果と比較すると、「ある(計)」は、前回調査(平成19年度調査)から12ポイント減少しており、「多いと感じることはない」は13ポイント増加している。

(数字は%)

	よくある	たまにはある	ある(計)	多いと感じることはない	分からない
平成24年度	42.5	32.2	74.6	24.4	0.9
平成19年度	57.7	28.4	86.1	11.9	2.0
平成14年度	56.6	29.5	86.2	12.1	1.7
平成11年度	51.6	32.2	83.9	13.8	2.3

カタカナ語の使用が多いと感じることが「ある(計)」



〔年齢別・過去の調査との比較〕

年齢別に過去の調査結果(平成14, 19年度)と比較すると、左のグラフのとおり。

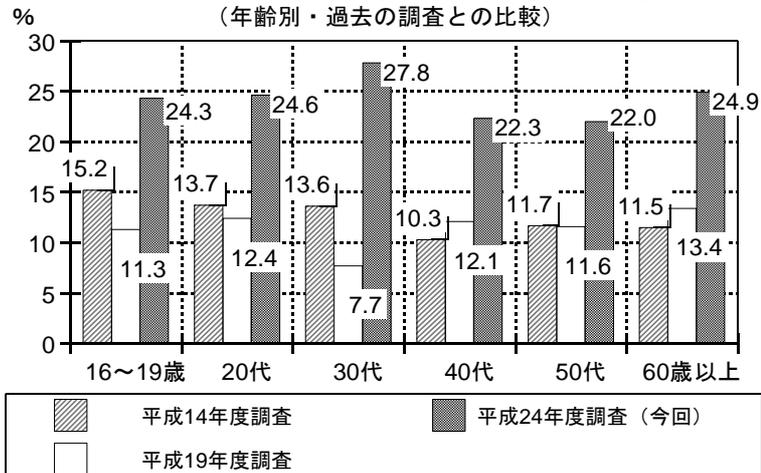
今回の調査では、カタカナ語の使用について多いと感じることが「よくある」「たまにはある」と回答した人を合わせた「ある(計)」の割合が、全ての年代で7割台となった。最近の過去2回の調査では、全ての年代において8割台から9割強で推移しており、平成19年度調査と比較すると、それぞれの年代で9~20ポイント減少している。

中でも30代では、平成19年度には91.6%と全ての年代の中で最も高かった「ある(計)」の割合が、今回、20ポイント減少し71.8%と最も低くなっている。

一方、「カタカナ語の使用が多いと感じることはない」は、全ての年代で2割台となった。最近の過去2回の調査では、全ての年代において、1割未満から1割台で推移しており、平成19年度調査と比較すると、それぞれの年代で10~20ポイント増加している。

中でも30代では、平成19年度には7.7%と全ての年代で最も低かった「多いと感じることはない」の割合が、今回、20ポイント増加して27.8%と4倍近くになり、最も高くなっている。

カタカナ語の使用が多いと感じることはない



日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に出てくる外来語や外国語などのカタカナ語の意味が分からずに困ることがあるか <問7> (P.20)
 — 困ることが「ある(計)」と回答した人が8割弱。60歳以上の3割強は、「よくある」と回答 —

〔全体〕

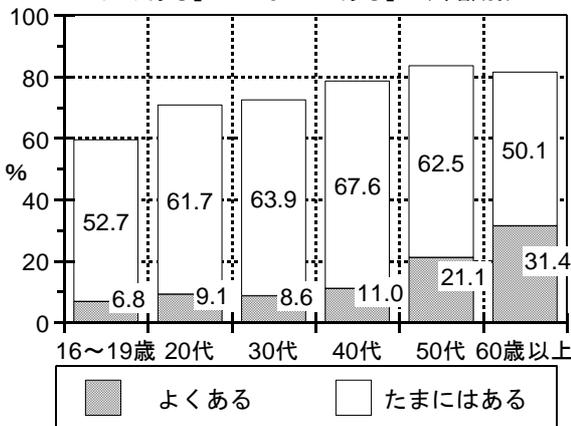
日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に出てくる外来語や外国語などのカタカナ語の意味が分からずに困ることが、よくあるか、たまにあるか、それとも、ないかを尋ねた。

結果は以下のとおり。「よくある」と「たまにはある」と回答した人を合わせた「ある(計)」の割合は8割弱、「困ることはない」は2割であった。

(数字は%)

ある(計)		困ることはない	分からない
78.5		20.9	0.6
よくある 21.0	たまにはある 57.5		

カタカナ語の意味が分からずに困ることがあるか
 「よくある」「たまにはある」(年齢別)



〔年齢別〕

カタカナ語の意味が分からずに困ることが「よくある」「たまにはある」と回答した人を年齢別に見ると、左のグラフのとおり。また、「よくある」「たまにはある」を合わせた「ある(計)」を年代別に見ると、下の表のとおり。

「よくある」と回答した人の割合は、16歳から30代までは1割に満たないが、40代で1割強、50代で2割強、60歳以上で3割強となっており、年代が高いほど、割合が高くなる傾向がある。

また、「よくある」「たまにはある」を合わせた「ある(計)」は、16~19歳では6割弱、20~30代では7割強であるが、40代以上では8割前後となっている。

(数字は%)

	16~19歳	20代	30代	40代	50代	60歳以上
ある(計)	59.5	70.9	72.5	78.6	83.6	81.4

日常生活の中で、外来語や外国語などのカタカナ語を交えて話したり書いたりしていることを好ましいと感じるか <問8> (P.22)
 — 平成19年度調査と比べて「別に何も感じない」と回答した人の割合が10ポイント増加 —

〔全体・過去の調査との比較〕

日常生活の中で、外来語や外国語などのカタカナ語を交えて話したり書いたりしていることをどちらかと言うと好ましいと感じるか、どちらかと言うと好ましくないと感じるか、それとも何も感じないかを尋ねた。

「別に何も感じない」と回答した人の割合が5割台半ばと最も高く、「どちらかと言うと好ましくないと感じる」が3割台半ば、「どちらかと言うと好ましいと感じる」は1割弱であった。

「別に何も感じない」と回答した人の割合は、前回の調査(平成19年度調査)から10ポイント増加している。一方、「どちらかと言うと好ましくないと感じる」、また、「どちらかと言うと好ましく感じる」は、共に5ポイント減少している。

	どちらかと言うと好ましいと感じる	どちらかと言うと好ましくないと感じる	別に何も感じない	分からない
平成24年度	9.3	35.3	54.0	1.4
平成19年度	14.5	39.8	43.7	2.0
平成14年度	16.2	36.6	45.1	2.0
平成11年度	13.3	35.5	48.8	2.4

3. 国語に関わる知識や能力についての課題

社会全般の国語に関わる知識や能力には、どのような課題があるか <問9> (P.27)

— 「敬語等の知識」を挙げた人の割合が最も高い —

〔全体・過去の調査との比較〕

国語に関わる知識や能力について、社会全般においてどのような点に課題があると思うかを尋ねた（選択肢の中から三つまで回答）。結果は以下のとおり。参考に、過去の調査結果（平成14、19年度調査）を併せて示した。（ただし、平成14、19年度は「日本人の国語力について、社会全般においてどのような点に課題があると思うか」という言い方で尋ねた。）

課題として「敬語等の知識」を挙げた人の割合が最も高く3割台半ばであった。続いて、「説明したり発表したりする能力」「他人の話を正確に聞く力」「考えをまとめ文章を構成する能力」「相手の立場や場面を認識する能力」が2割台半ばで続いている。

	平成24年度調査	平成19年度調査	平成14年度調査
・敬語等の知識	35.6%	42.1%	35.3%
・説明したり発表したりする能力	26.6%	29.7%	33.1%
・他人の話を正確に聞く力	24.8%	36.8%	(選択肢なし)
・考えをまとめ文章を構成する能力	24.1%	22.7%	36.0%
・相手の立場や場面を認識する能力	23.8%	31.6%	11.5%
・漢字や仮名遣い等の文字や表記の知識	22.3%	28.0%	29.0%

自分自身の国語に関わる知識や能力には、どのような課題があるか <問10> (P.30)

— 社会で求められる実務能力を重視する傾向 —

〔全体・過去の調査との比較〕

国語に関わる知識や能力について、回答者自身は、どのような点で自信を持っていないかを尋ねた（選択肢の中から三つまで回答）。結果は以下のとおり。参考に、過去の調査結果（平成14、19年度調査）を併せて示した。（ただし、平成14、19年度は「日本人の国語力について、あなた自身は、どのような点で自信を持っていないか」という言い方で尋ねた。）

「説明したり発表したりする能力」を挙げた人の割合が最も高く3割弱、続いて「考えをまとめ文章を構成する能力」が2割台後半で続いている。主に、社会で求められる実務的な能力を自身の課題として挙げる傾向があり、このことは過去の調査から変わっていない。

	平成24年度調査	平成19年度調査	平成14年度調査
・説明したり発表したりする能力	29.6%	32.5%	30.6%
・考えをまとめ文章を構成する能力	27.8%	29.8%	36.1%
・漢字や仮名遣い等の文字や表記の知識	19.2%	29.1%	27.4%
・敬語等の知識	18.3%	25.6%	21.9%
・論理的に考える能力	17.6%	17.7%	19.0%
・分析して要点をつかむ能力	17.6%	15.5%	17.0%

4. 文字の手書きについて

ふだん、手書きで文字を書く方か <問11> (P.33)

— 平成16年度調査の結果と比べて、全ての場合で、「手書きをする」(計)が11～16ポイント減少 —

〔全体・過去の調査との比較〕

四つの場合に関して、ふだん、手書きで文字を書く方か、それとも書かない方かを尋ねた。

「いつも手書きをする」と「大体手書きをする」を合わせた「手書きをする(計)」は、「はがきや手紙などの宛名」「はがきや手紙などの本文」で6割台半ば、「年賀状の宛名」で5割、「報告書やレポートなどの文章」で3割となっている。

過去の調査結果(平成16年度調査)と比較すると、四つの場合全てで、「手書きをする(計)」を選んだ人の割合が減少している。中でも、「報告書やレポートなどの文章」で16ポイント、「年賀状の宛名」で15ポイント、それぞれ減少している。

(数字は%, 【 】内は平成16年度調査)

	いつも手書きをする	大体手書きをする	手書きをする(計)	手書きをしたりしなかったりする	余り手書きをしない	全く手書きをしない	手書きをしない(計)	分からない
(1)はがきや手紙などの宛名	53.9 【67.5】	12.8 【12.0】	66.7 【79.5】	6.5 【5.8】	12.9 【7.9】	10.3 【6.1】	23.2 【14.0】	3.7 【0.8】
(2)年賀状の宛名	43.1 【57.3】	7.4 【7.8】	50.6 【65.1】	5.0 【6.3】	14.4 【11.7】	26.1 【16.1】	40.5 【27.8】	3.9 【0.8】
(3)はがきや手紙などの本文	50.5 【62.4】	13.0 【12.4】	63.5 【74.9】	8.5 【9.1】	11.3 【7.7】	11.4 【7.4】	22.7 【15.1】	5.2 【1.0】
(4)報告書やレポートなどの文章	22.9 【37.5】	7.2 【8.3】	30.1 【45.8】	8.1 【9.0】	15.2 【13.2】	26.5 【23.3】	41.7 【36.5】	20.1 【8.7】

〔年齢別〕

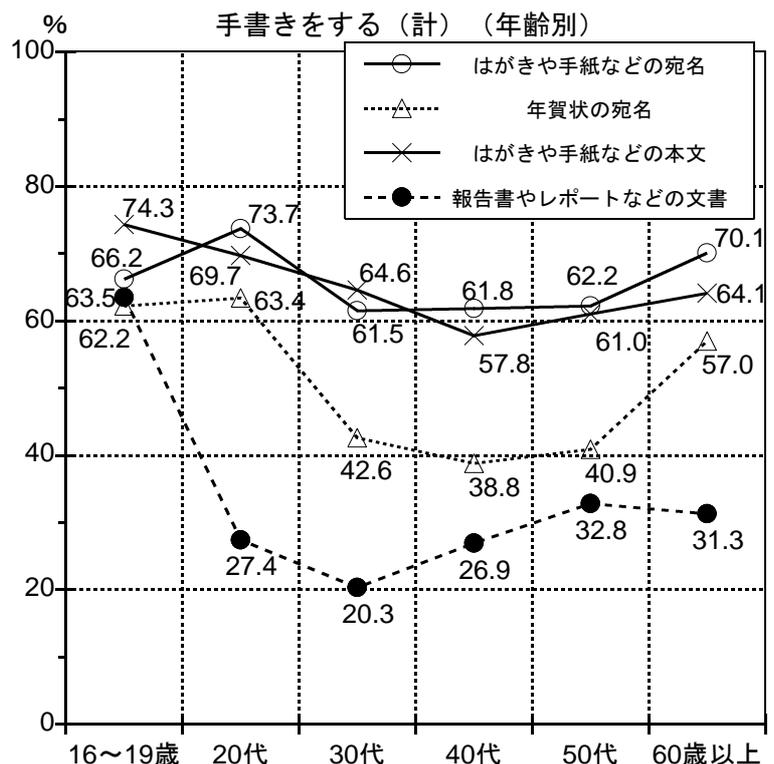
(1)～(4)について、「いつも手書きをする」と「大体手書きをする」を合わせた「手書きをする(計)」を年齢別に見ると、右のグラフのとおり。

(1)「はがきや手紙などの宛名」と(3)「はがきや手紙などの本文」では、全ての年代を通して、「手書きをする(計)」の割合が6割弱から7割台半ばまでとなっている。

(2)「年賀状の宛名」では、「手書きをする(計)」の割合が30～50代で4割前後となっており、他の年代に比べて低い。

(4)「報告書やレポートなどの文書」では、16～19歳を除いて、「手書きをする(計)」の割合が2割～3割強と低くなっている。

16～19歳では、全ての場合で、「手書きをする(計)」が6割以上であった。



5. 手紙の作法について

今後、手紙の作法はどうあるべきだと思うか <問12> (P. 36)

— 伝統的な書式を守るべきという人が若年層を中心に大きく増加 —

(1) どちらの考えに近いか

- (a) 手紙の伝統的な書式を今後も守っていくべきである
- (b) 手紙の書式は伝統的な書式にこだわらなくてもよい

[全体・過去の調査との比較]

今後、手紙の作法はどうあるべきだと思うかについて、(a) 手紙の伝統的な書式を今後も守っていくべきである、(b) 手紙の書式は伝統的な書式にこだわらなくてもよい の二つを挙げて、どちらの考えに近いかを尋ねた。

(a) の「手紙の伝統的な書式を今後も守っていくべきである」を挙げた人が5割弱となり、3割台半ばであった(b)の「手紙の書式は伝統的な書式にこだわらなくてもよい」を上回った。

過去の調査結果(平成16年度調査)では、(a)と(b)の差は1ポイントと小さかったが、今回の調査では、14ポイントまで開いている。

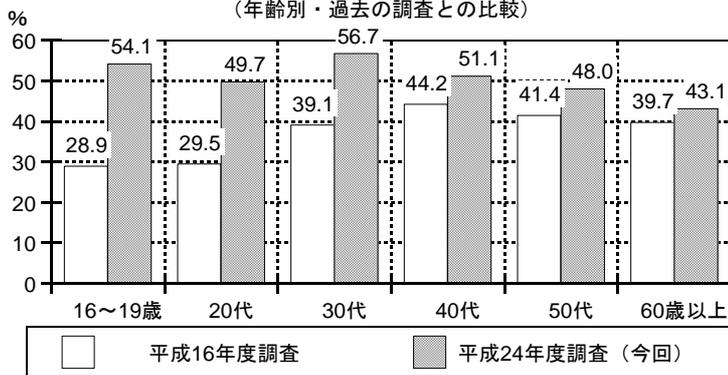
		平成16年度
・手紙の伝統的な書式を今後も守っていくべきである	47.8%	39.3%
・手紙の書式は伝統的な書式にこだわらなくてもよい	34.1%	38.1%
・どちらとも言えない	17.2%	20.3%
・分からない	0.9%	2.3%

[年齢別・過去の調査との比較]

年齢別に過去の調査結果(平成16年度)と比較すると、左のグラフのとおり。

手紙の伝統的な書式を今後も守っていくべきである

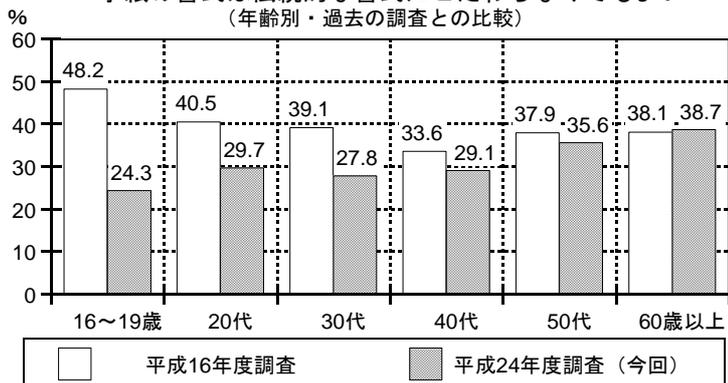
(年齢別・過去の調査との比較)



今回の調査では、「(a) 手紙の伝統的な書式を今後も守っていくべきである」を選んだ人の割合は、60歳以上を除き、5割弱から5割台半ばとなっている。どの年代でも(a)を選んだ人は増加しているが、中でも、平成16年度調査では3割に満たなかった16歳~20代で20ポイント以上の増加が見られる。

手紙の書式は伝統的な書式にこだわらなくてもよい

(年齢別・過去の調査との比較)



「(b) 手紙の書式は伝統的な書式にこだわらなくてもよい」を選んだ人の割合は、60代で4割弱、50代で3割台半ばとなっているが、40代以下の年代では全て3割に達していない。平成16年度の調査結果と比較すると、(b)を選んだ人の割合は、60歳以上を除いて減少しており、16~19歳では24ポイント、20代と30代で共に11ポイント減少している。年齢が上がるに従い、「手紙の書式は伝統的な書式にこだわらなくてもよい」と考える人の割合が高くなる傾向が見られる。

(2) どちらの考えに近いか

- (a) 今後なるべく手書きで手紙を書くようにすべきである
- (b) 今後は手紙も手書きにこだわらないようにすべきである

〔全体・過去の調査との比較〕

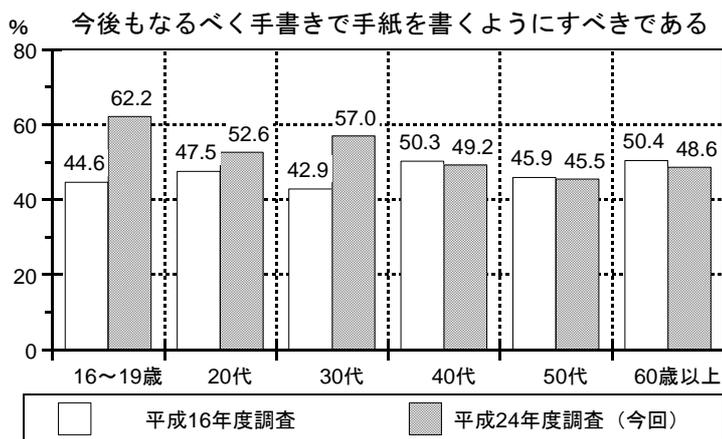
今後、手紙の作法はどうあるべきだと思うかについて、(a) 今後なるべく手書きで手紙を書くようにすべきである、(b) 今後は手紙も手書きにこだわらないようにすべきである の二つを挙げて、どちらの考えに近いかを尋ねた。

(a) の「今後なるべく手書きで手紙を書くようにすべきである」を挙げた人が5割となり、2割台半ばであった (b) の「今後は手紙も手書きにこだわらないようにすべきである」を上回った。

過去の調査結果（平成16年度調査）と比較すると、大きな変化は見られない。

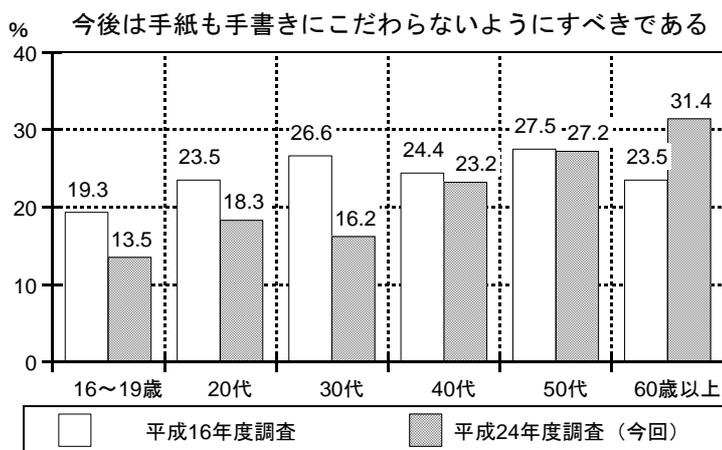
	平成16年度	平成24年度
・今後なるべく手書きで手紙を書くようにすべきである	50.2%	47.8%
・今後は手紙も手書きにこだわらないようにすべきである	25.8%	24.8%
・どちらとも言えない	23.4%	25.4%
・分からない	0.7%	2.0%

〔年齢別・過去の調査との比較〕



年齢別に過去の調査結果（平成16年度）と比較すると、左のグラフのとおり。

今回の調査では、「(a) 今後なるべく手書きで手紙を書くようにすべきである」を選んだ人の割合は、16～19歳では6割強、20～30代では5割台、40代以上では4割台後半となっている。また、(a)を選んだ人の割合は、30代以下では増加しているが、40代以上では、余り変わらないか、僅かに減少している。そのうち、16～19歳では18ポイント、30代では14ポイントの増加が見られる。



「(b) 今後は手紙も手書きにこだわらないようにすべきである」を選んだ人の割合は、16歳～30代では1割台、40～50代では2割台、60代で3割強となっている。平成16年度の調査結果と比較すると、(b)を選んだ人の割合は、60歳以上を除いて全ての年代で減少しており、中でも30代では10ポイント減少している。一方、60歳以上では8ポイント増加している。年齢が上がるに従い、「今後は手紙も手書きにこだわらないようにすべきである」と考える人の割合が高くなる傾向が見られる。

6. 言葉の意味や使い方が分からないときにどうするか

言葉遣いに迷ったり、言葉の意味や使い方が分からなかったりしたときに、
どのようにしているか<問13> (P. 39)

— 「紙の辞書を引く」「インターネット上の辞書を利用する」が4割台 —

〔全体〕

言葉遣いに迷ったり、言葉の意味や使い方が分からなかったりしたときに、どのようにしているかを尋ねた（選択肢の中から幾つでも回答）。

「紙の辞書を引く」と回答した人の割合が最も高く4割台後半であった。続いて「インターネット上の辞書を利用する」（43.1%）、「誰かに教えてもらう」（39.6%）と回答した人が多い。

「特に何もせず、そのままにすることが多い」と回答した人は1割に満たなかった。

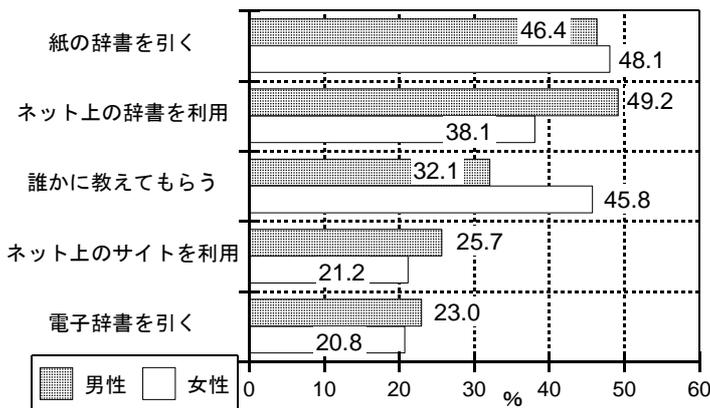
・紙の辞書を引く	47.3%
・インターネット上の辞書を利用する	43.1%
・誰かに教えてもらう	39.6%
・インターネット上の言葉に関するサイトを利用する	23.2%
・電子辞書を引く	21.8%
・言葉に関する紙の本を調べる	11.1%
・言葉に関する電子書籍を調べる	2.6%
・その他	1.2%
・特に何もせず、そのままにすることが多い	3.9%
・分からない	0.3%

言葉の意味や使い方が分からないときにどうするか(性別)

〔性別〕

選択した人の割合が高かったもの、上位5項目について、性別に見ると、左のグラフのとおり。

「インターネット上の辞書を利用する」と回答した人の割合は男性（49.2%）の方が女性（38.1%）よりも11ポイント高くなっている。一方、「誰かに教えてもらう」と回答した人の割合は、女性（45.8%）の方が男性（32.1%）よりも14ポイント高くなっている。



〔年齢別〕

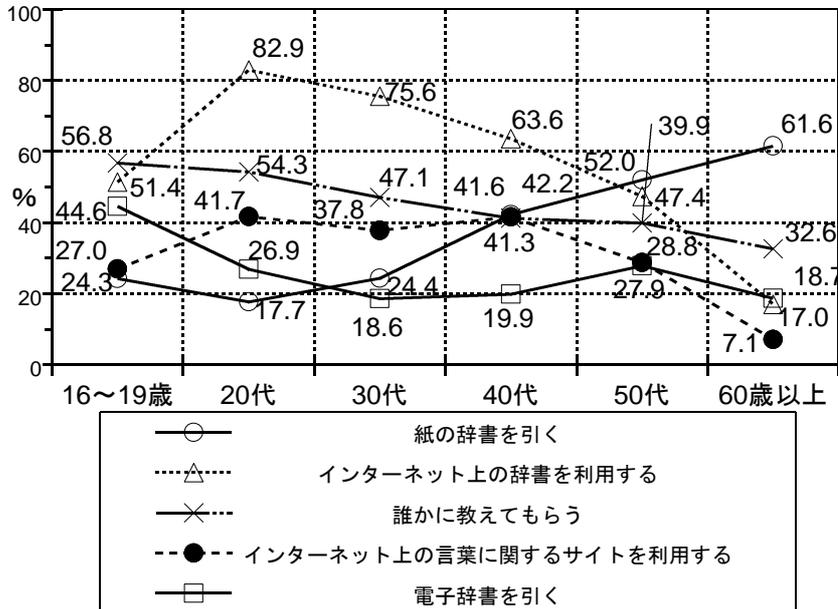
選択した人の割合が高かったもの、上位5項目について、年齢別に見ると、右のグラフのとおり。

「紙の辞書を引く」は、60歳以上で6割強、50代で5割強、40代で4割強となっているが、30代と16～19歳では2割台半ば、20代では2割を切っている。

「インターネット上の辞書を利用する」は20代で8割台前半、30代で7割台半ばと他の年代に比べて高く、一方、60歳以上では2割を切っている。

「誰かに教えてもらう」を選んだ人の割合は、年代が上がるに従い、低くなっている。

言葉の意味や使い方が分からないときにどうするか（年齢別）



7. 同訓の漢字の使い方について

文章を書くときに、漢字の選び方で迷うことがあるか、それとも、ないか<問14> (P. 41)
 — 約75%の人が「ある(計)」と回答 —

〔全体・年齢別〕

文章を書くときに、漢字の選び方（例えば、「かえる」と書くときに「変える」「替える」「換える」「代える」, 「あらわす」と書くときに「表す」「現す」「著す」の, それぞれどれを使うかなど。）で迷うことがあるか、それとも、ないかを尋ねた。

「よくある」と「時々ある」を選んだ人を合わせた「ある(計)」は74.7%, 「余りない」と「ない」を合わせた「ない(計)」は24.6%であった。

年齢別に見ると、「ある(計)」の割合は、30～50代で8割前後となっている。一方、16歳から20代と60歳以上では「ある(計)」が7割前後となっている。

(数字は%)

	よくある	時々ある	ある(計)	余りない	ない	ない(計)	分からない
全体	25.0	49.7	74.7	18.0	6.6	24.6	0.7
16～19歳	21.6	48.6	70.3	23.0	6.8	29.7	—
20代	20.0	47.4	67.4	25.1	7.4	32.6	—
30代	23.4	54.6	78.0	18.6	3.1	21.6	0.3
40代	26.3	56.9	83.2	11.9	4.9	16.8	—
50代	26.6	54.5	81.1	13.0	5.9	18.9	—
60歳以上	25.6	44.7	70.3	19.8	8.3	28.1	1.6

漢字に直すとしたらどれを使うか<問15> (P. 43)

— 「とる」「すすめる」で、回答の揺れが比較的大きい —

五つの言葉「とる」「おさまる」「はかる」「すすめる」「つとめる」について、漢字に直すとしたら、どの漢字を使うかを尋ねた。結果は、それぞれ以下のとおり。

漢字の使い方としては、(1)は「採」、(2)は「治」、(3)は「測」、(4)は「薦」、(5)は「務」を選ぶのが一般的と考えられる。(表とグラフには、それぞれ下線を付した。)

(1) 会議で決をとる

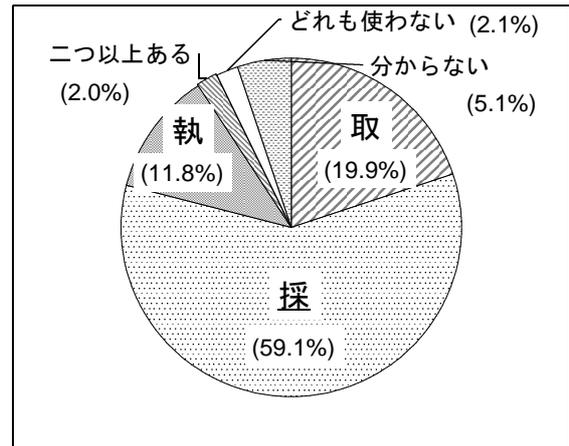
[全体・年齢別]

「採」を選んだ人の割合が6割弱と最も高く、「取」が2割、「執」が1割強という結果であった。

(数字は%)

	取	採	執	二つ以上
全体	19.9	59.1	11.8	2.0
16~19歳	17.6	48.6	24.3	4.1
20代	14.9	62.9	18.3	2.3
30代	21.3	57.7	13.4	1.4
40代	17.4	69.1	8.0	1.8
50代	22.0	60.1	9.9	3.7
60歳以上	20.8	55.9	11.1	1.6

会議で決を【と】る



(2) 痛みがおさまる

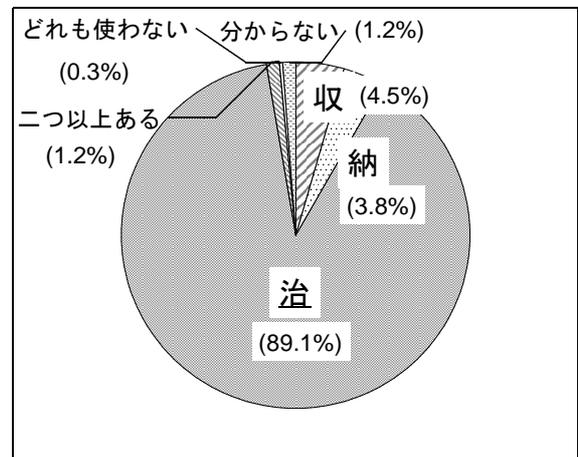
[全体・年齢別]

「治」を選んだ人の割合が9割弱と最も高く、「収」と「納」は、共に1割に満たないという結果であった。

(数字は%)

	収	納	治	二つ以上
全体	4.5	3.8	89.1	1.2
16~19歳	5.4	4.1	89.2	—
20代	8.6	1.1	88.0	2.3
30代	1.7	2.7	94.5	1.0
40代	3.7	1.8	93.3	0.6
50代	4.3	4.6	89.2	1.5
60歳以上	4.8	4.9	86.2	1.1

痛みが【おさ】まる

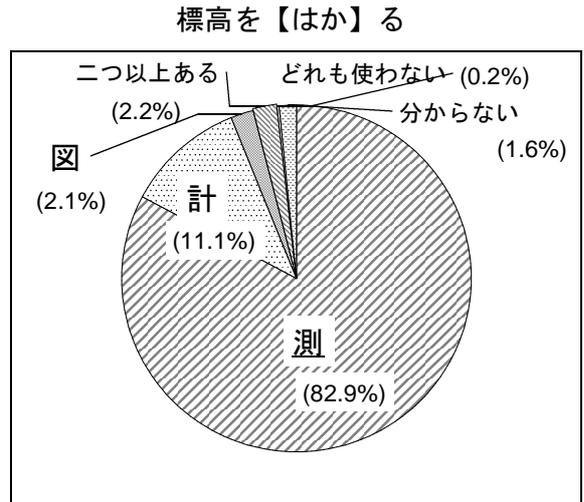


(3) 標高をはかる

〔全体・年齢別〕

「測」を選んだ人の割合が8割を超え最も高く、「計」が1割強、「図」が1割に満たないという結果であった。
(数字は%)

	測	計	図	二つ以上
全 体	82.9	11.1	2.1	2.2
16~19歳	86.5	6.8	—	6.8
20 代	85.7	10.9	1.7	1.7
30 代	88.7	7.6	1.7	2.1
40 代	85.0	8.9	3.1	2.4
50 代	83.0	11.5	2.2	2.8
60歳以上	79.5	13.1	2.1	1.7

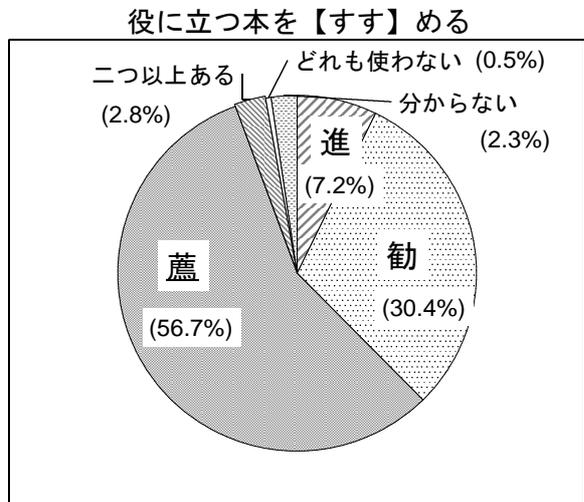


(4) 役に立つ本をすめる

〔全体・年齢別〕

「薦」を選んだ人の割合が5割台半ばと最も高く、「勸」が3割、「進」が1割に満たないという結果であった。
(数字は%)

	進	勸	薦	二つ以上
全 体	7.2	30.4	56.7	2.8
16~19歳	—	43.2	50.0	6.8
20 代	0.6	35.4	60.0	3.4
30 代	2.1	30.6	61.5	5.2
40 代	2.1	32.4	62.1	3.1
50 代	4.0	29.4	62.5	2.8
60歳以上	13.4	28.1	51.4	1.7

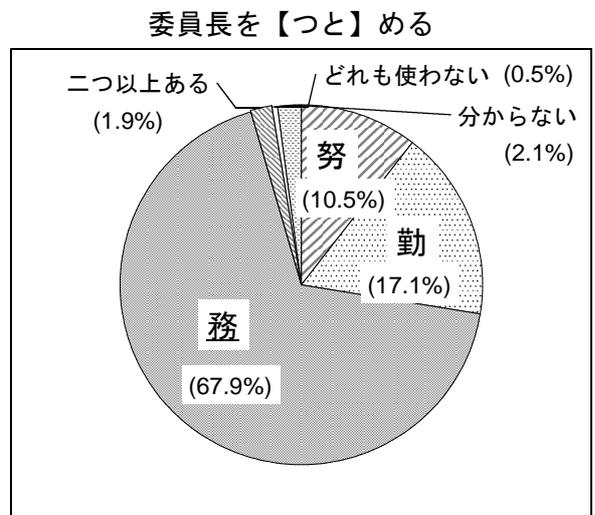


(5) 委員長をつとめる

〔全体・年齢別〕

「務」を選んだ人の割合が7割弱と最も高く、「勤」が2割弱、「努」が1割強という結果であった。
(数字は%)

	努	勤	務	二つ以上
全 体	10.5	17.1	67.9	1.9
16~19歳	13.5	20.3	59.5	6.8
20 代	6.9	15.4	74.9	1.7
30 代	11.0	14.8	70.4	2.4
40 代	10.4	12.2	74.3	2.1
50 代	12.1	12.7	72.1	1.9
60歳以上	10.3	21.0	62.9	1.3



8. 五つの言い方の認知と使用

「きんきんに冷えた」「さくさく動く」など五つの言い方を聞いたことがあるか、また、使うことがあるか〈問16及び付問〉 (P. 50)

—「うるうる」は8割台半ば、「きんきん」は7割台半ばの人が聞いたことがあると回答—

〔全体・付問〕

「きんきんに冷えたビール」「パソコンがさくさく動く」など、五つの言い方を聞いたことがあるかどうかを尋ねた。

「聞いたことがある」と回答した人の割合が最も高かったのは、「うるうるとした瞳」(85.1%)で、8割台半ばであった。一方、「パソコンがさくさく動く」(38.3%)は4割弱であった。

また、「聞いたことがある」と答えた人たちに、それぞれの言葉を使うことがあるかを尋ねたところ、「使ったことがある」と回答した人の割合が最も高かったのは「うるうるとした瞳」(全体の49.5%)であった。

(数字は%)

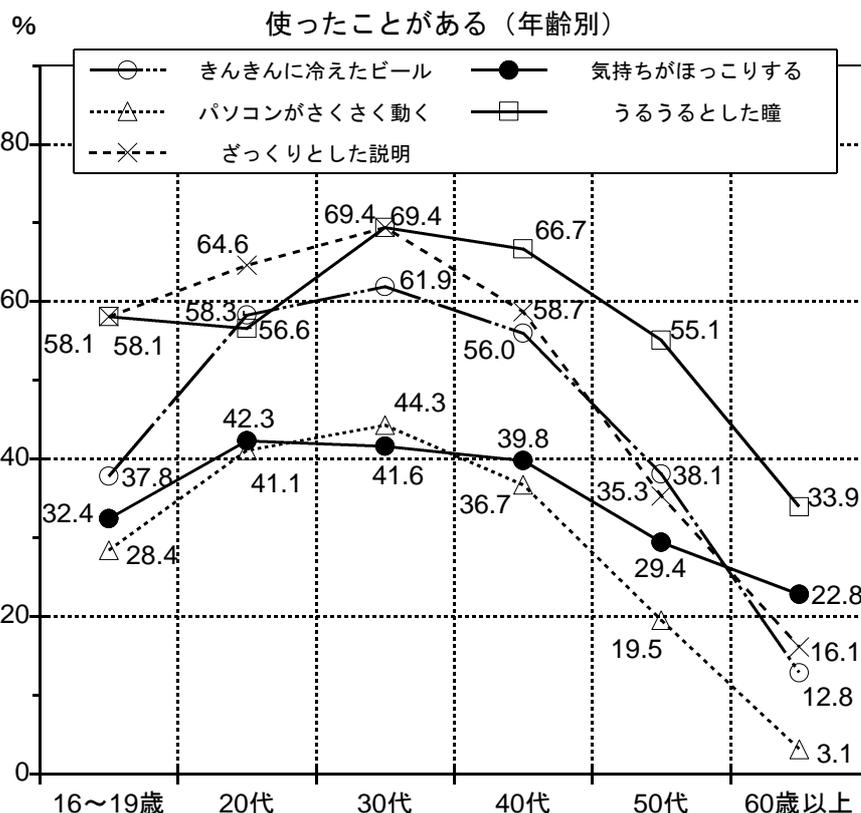
	聞いたことがある			聞いたことがない	分からない
	使ったことがある	使ったことがない	分からない		
きんきんに冷えたビール	76.0			23.5	0.5
	使ったことがある	使ったことがない	分からない		
	34.3	41.3	0.3		
パソコンがさくさく動く	38.3			59.8	1.9
	使ったことがある	使ったことがない	分からない		
	20.2	18.1	0.0		
ざっくりとした説明	70.6			28.3	1.2
	使ったことがある	使ったことがない	分からない		
	38.0	32.5	0.0		
気持ちがほっこりする	70.5			28.6	0.9
	使ったことがある	使ったことがない	分からない		
	30.8	39.5	0.1		
うるうるとした瞳	85.1			14.4	0.6
	使ったことがある	使ったことがない	分からない		
	49.5	35.3	0.2		

〔年齢別〕

五つの言い方について、「使ったことがある」と回答した人の割合を、年齢別に見ると、右のグラフのとおり。

「気持ちがほっこりする」を除く四つの言葉については、使うことがあると回答した人の割合は、30代で最も高くなっている。「気持ちがほっこりする」は、20代が最も高くなっている。

一方、60歳以上で、五つの言い方の全てについて、使うことがあると回答した人の割合が最も低くなっている。



9. 言葉の意味

どちらの意味だと思うか <問17> (P.52)

— 「役不足」「流れに棹さす」「気が置けない」「嘖飯もの」は

本来とは違う意味の方が多く選択されている —

〔全体〕

五つの言葉を挙げて、どの意味で使っているかを尋ねた。辞書等で本来の意味とされるものに下線を付け、また、グラフ中では———の線で示した。

今回尋ねた五つの言葉のうち、(1)「役不足」(2)「流れに棹さす」(3)「気が置けない」(5)「嘖飯もの」は、本来の意味ではない方が多く選択されるという結果となった。

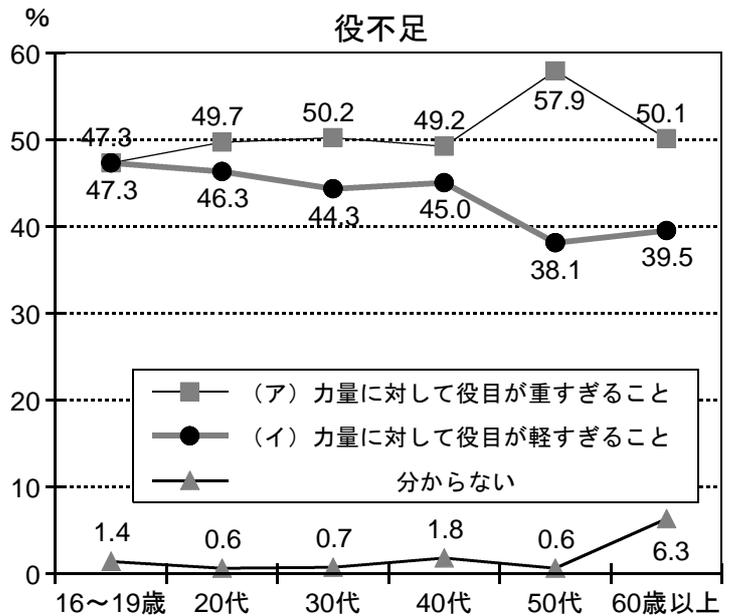
役不足	例文：彼には役不足の仕事だ		平18	平14	
(ア)	本人の力量に対して役目が重すぎること	51	0%	50.3%	62.8%
(イ)	本人の力量に対して役目が軽すぎること	41	6%	40.3%	27.6%
(ア)と(イ)の両方		2	5%	2.9%	2.8%
(ア),(イ)とは全く別の意味		1	6%	0.3%	1.8%
分からない		3	4%	6.2%	5.0%
流れに棹さす	例文：その発言は流れに棹さすものだ		平18	平14	
(ア)	傾向に逆らって、ある事柄の勢いを失わせるような行為をする	59	4%	62.2%	63.6%
(イ)	傾向に乗って、ある事柄の勢いを増すような行為をする	23	4%	17.5%	12.4%
(ア)と(イ)の両方		1	6%	1.5%	1.1%
(ア),(イ)とは全く別の意味		1	4%	0.3%	1.5%
分からない		14	2%	18.5%	21.4%
気が置けない	例文：その人は気が置けない人ですね。		平18	平14	
(ア)	相手に対して気配りや遠慮をしなくてよい	42	7%	42.4%	44.6%
(イ)	相手に対して気配りや遠慮をしなくてはならない	47	6%	48.2%	40.1%
(ア)と(イ)の両方		1	2%	1.4%	2.2%
(ア),(イ)とは全く別の意味		4	7%	1.4%	6.3%
分からない		3	8%	6.7%	6.9%
潮時	例文：そろそろ潮時だ。				
(ア)	ちょうどいい時期	60	0%		
(イ)	ものごとの終わり	36	1%		
(ア)と(イ)の両方		2	5%		
(ア),(イ)とは全く別の意味		0	4%		
分からない		1	0%		
嘖飯もの	例文：彼の発言は嘖飯ものだ。				
(ア)	腹立たしくて仕方ないこと	49	0%		
(イ)	おかしくてたまらないこと	19	7%		
(ア)と(イ)の両方		1	1%		
(ア),(イ)とは全く別の意味		2	8%		
分からない		27	4%		

〔年齢別〕

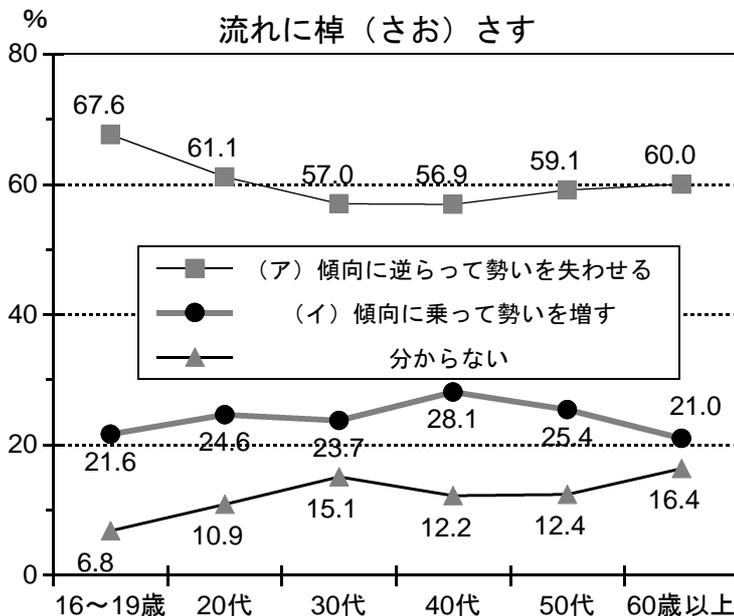
それぞれの言葉を年齢別に見ると、以下のとおり。

(1) 役不足

16～19歳を除く全ての年代で、本来の意味ではない(ア)「本人の力量に対して役目が重すぎる」と(イ)「本人の力量に対して役目が軽すぎる」とを比べている。中でも、50代では(ア)を選んだ人の割合と(イ)を選んだ人の割合に20ポイントの差がある。一方、16～19歳では(ア)と(イ)の割合が同じとなっている。



流れに棹(さお)さす



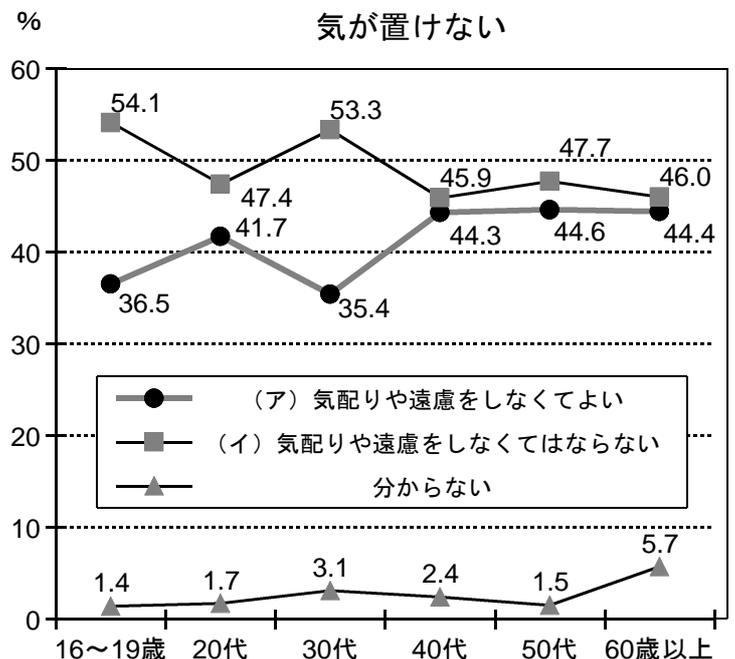
(2) 流れに棹さす

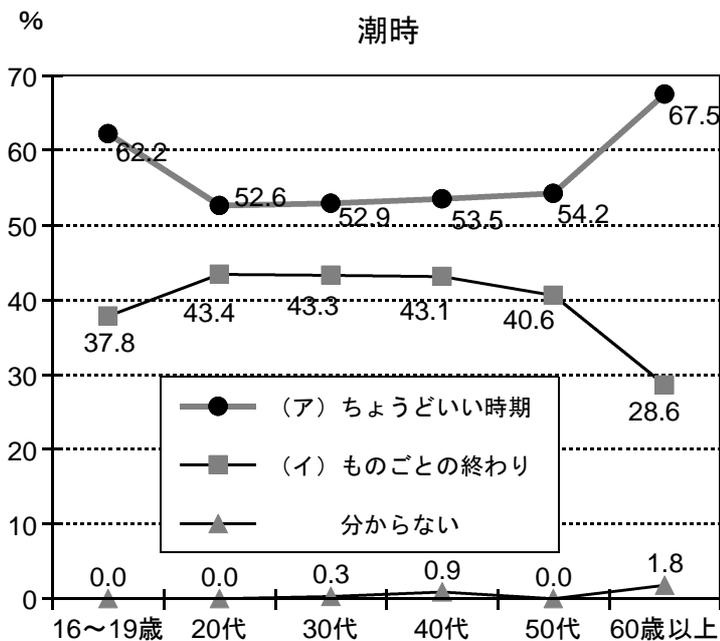
全ての年代で、本来の意味ではない(ア)「傾向に逆らって、ある事柄の勢いを失わせるような行為をする」と(イ)「傾向に乗って、ある事柄の勢いを増すような行為をする」を比べている。また、「分からない」と回答した人の割合は20代以上で1割を超えている。

(3) 気が置けない

全ての年代で、本来の意味ではない(イ)「相手に気配りや遠慮をしなくてはいけない」と(ア)「相手に気配りや遠慮をしなくてよい」を比べている。16～19歳と30代では、(イ)と(ア)の差が18ポイントとなっている。一方、40代以上では、その差が2～3ポイントと小さい。

気が置けない





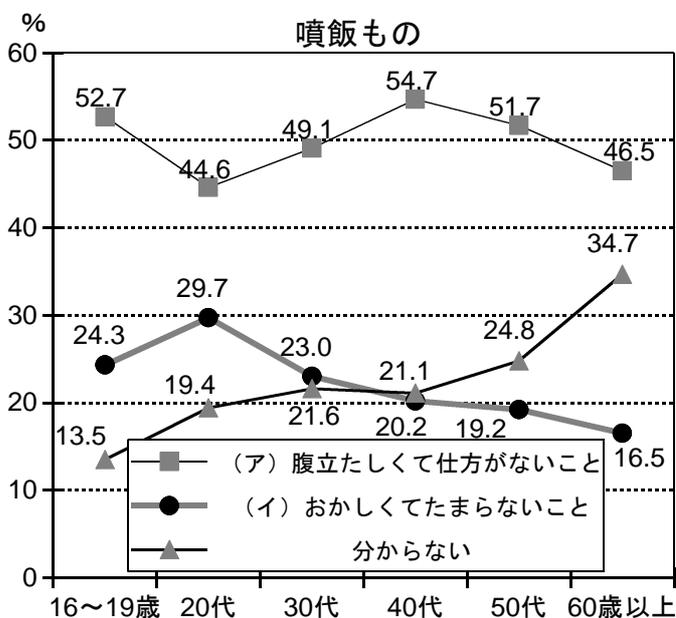
(4) 潮時

全ての年代で、本来の意味である(ア)「ちょうどいい時期」を選んだ人の割合が、本来の意味ではない(イ)「ものごとの終わり」を選んだ人の割合を上回っている。中でも、16~19歳と60歳以上で(ア)を選んだ人の割合が6割台となっており、(ア)と(イ)の差は16~19歳で24ポイント、60歳以上で39ポイントと他の年代に比べて大きい。

(5) 噴飯もの

全ての年代で、本来の意味ではない(ア)「腹立たしくて仕方がないこと」を選んだ人の割合が、本来の意味である(イ)「おかしくてたまらないこと」を選んだ人の割合を大きく上回っている。

一方で、「分からない」と回答した人の割合が20~50代で2割前後となっているなど、今回取り上げた五つの語の中で最も高い。



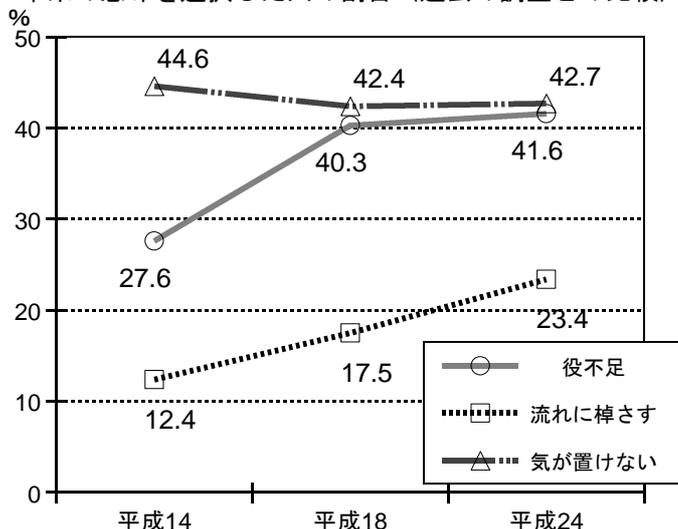
〔過去の調査との比較〕

経年の調査である(1)「役不足」(2)「流れに棹さす」(3)「気が置けない」について、本来の意味を選択した人の割合を過去の調査(平成14, 18年度)結果と比較すると、右のグラフのとおり。

「役不足」は、本来の意味を選択した人の割合が平成18年度には14年度から13ポイント増加したが、今回の調査では、18年度と比べて余り変化がない。

「流れに棹さす」は、本来の意味を選択した人の割合が調査のたびに少しずつ増加してきており、今回の調査でも、平成18年度から6ポイント増加している。しかし、「気が置けない」は、3回の調査を通して本来の意味を選んだ人の割合に余り変化がない。

本来の意味を選択した人の割合 (過去の調査との比較)



10. 慣用句の言い方

どちらの言い方を使うか <問18> (P. 59)

— 本来の言い方「押しも押されもせぬ」「怒り心頭に発する」を使うのは少数派 —

〔全体・過去の調査との比較〕

二つの言い方のどちらを使うか、五つの場合について尋ねた。辞書等で本来の言い方とされるものに下線を付け、また、グラフ中では———の線で示した。

本来の言い方とされる「押しも押されもせぬ」「怒り心頭に発する」を使うという人の割合は、本来の言い方ではない「押しも押されぬ」「怒り心頭に達する」を下回っている。また、「的を射る／的を得る」では、過去の調査では、本来の言い方ではない「的を得る」を使うという人の割合が高かったが、今回の調査では、本来の言い方である「的を射る」を使うという人の割合が上回った。

(1) 「つっけんどんで相手を顧みる態度が見られないこと」を	平成15年度
<u>(a) 取り付く島がない</u> …………… 47. 8%	44. 4%
(b) 取り付く暇がない…………… 41. 6%	42. 0%
(a) と (b) の両方とも使う…………… 1. 0%	1. 7%
(a) と (b) のどちらも使わない…………… 5. 3%	6. 9%
分からない…………… 4. 3%	5. 0%
(2) 「実力があって堂々としていること」を	平成15年度
(a) 押しも押されぬ…………… 48. 3%	51. 4%
<u>(b) 押しも押されもせぬ</u> …………… 41. 5%	36. 9%
(a) と (b) の両方とも使う…………… 2. 3%	3. 2%
(a) と (b) のどちらも使わない…………… 5. 2%	5. 3%
分からない…………… 2. 6%	3. 2%
(3) 「物事の肝腎な点を確実に捉えること」を	平成15年度
<u>(a) 的を射る</u> …………… 52. 4%	38. 8%
(b) 的を得る…………… 40. 8%	54. 3%
(a) と (b) の両方とも使う…………… 2. 4%	2. 6%
(a) と (b) のどちらも使わない…………… 2. 1%	1. 7%
分からない…………… 2. 2%	2. 5%
(4) 「いよいよというときに使う、とっておきの手段」を	平成16年度 【※】
(a) 天下の宝刀…………… 31. 7%	25. 4%
<u>(b) 伝家の宝刀</u> …………… 54. 6%	41. 0%
(a) と (b) の両方とも使う…………… 1. 5%	2. 8%
(a) と (b) のどちらも使わない…………… 6. 0%	20. 3%
分からない…………… 6. 1%	10. 5%
(5) 「激しく怒ること」を	平成17年度
(a) 怒り心頭に達する…………… 67. 1%	74. 2%
<u>(b) 怒り心頭に発する</u> …………… 23. 6%	14. 0%
(a) と (b) の両方とも使う…………… 1. 3%	1. 8%
(a) と (b) のどちらも使わない…………… 5. 0%	— 【*】
分からない…………… 3. 0%	10. 0%

※ 平成16年度調査では、「知事は議会解散という天下の宝刀を抜いた／伝家の宝刀を抜いた」のどちらを使うかを尋ねた。

* 平成17年度調査では「(a) と (b) のどちらも使わない」は選択肢になかった。

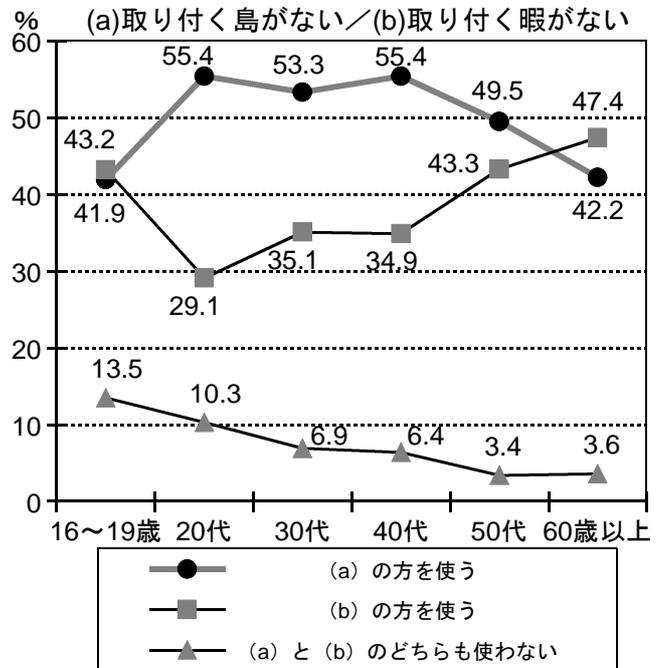
〔年齢別〕

それぞれの言い方を年齢別に見ると、以下のとおり。

(1) (a)取り付く島がない／(b)取り付く暇がない

20代～50代では、本来の言い方である(a)「取り付く島がない」を使うと答えた人の割合が、本来の言い方でない(b)「取り付く暇がない」を上回っている。16～19歳と60歳以上では、(b)の割合の方が高い。

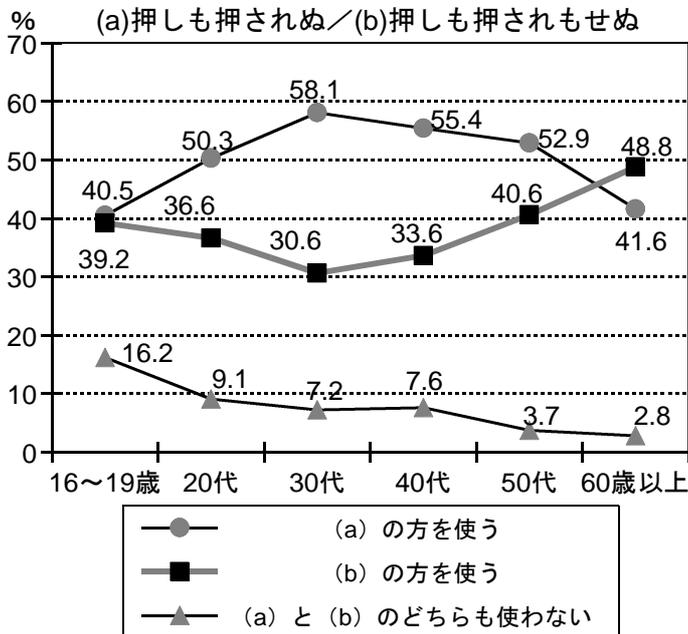
また、「(a)と(b)のどちらも使わない」と回答した人の割合は、年齢が若くなるに従って高くなる傾向にあり、20代以下では1割を超えている。



(2) (a)押しも押されぬ／(b)押しも押されもせぬ

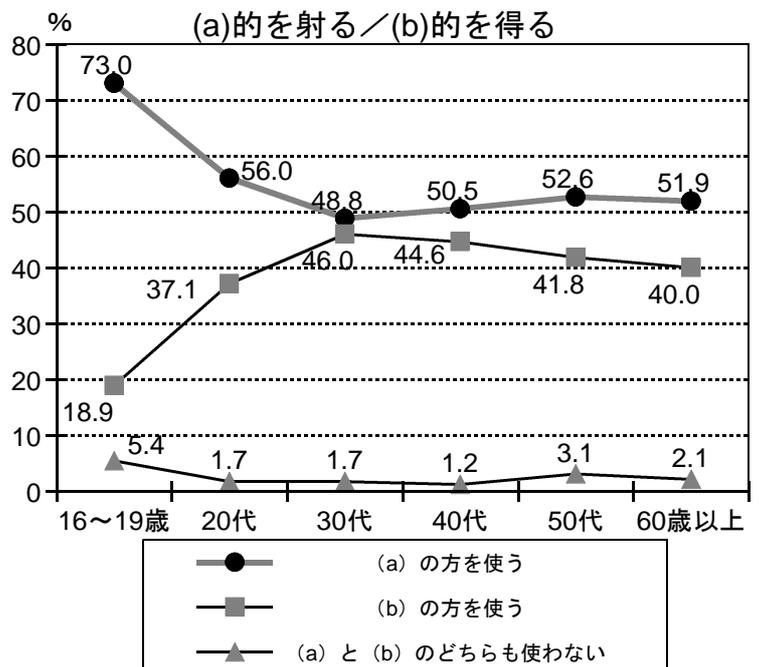
60歳以上を除く全ての年代で、本来の言い方ではない(a)「押しも押されぬ」を使うと答えた人の割合が、本来の言い方である(b)「押しも押されもせぬ」を上回っている。20代から50代では、(a)が5割を超えている。60歳以上では、(b)の割合の方が高い。

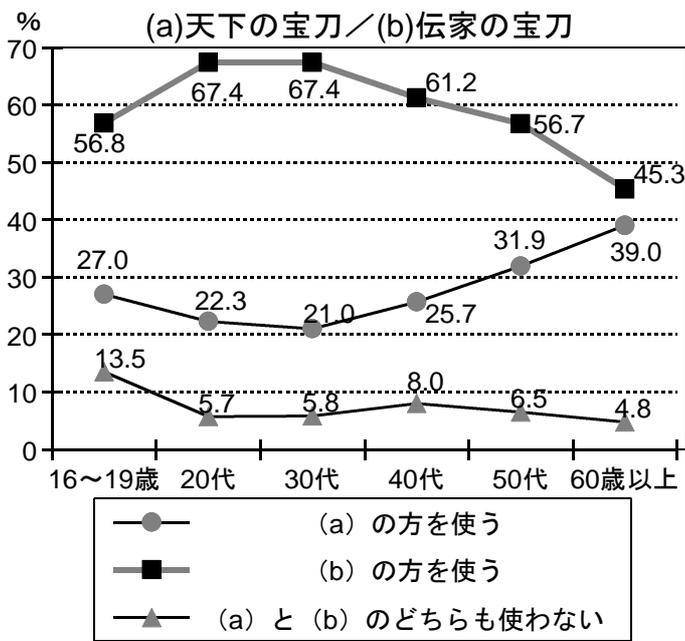
また、「(a)と(b)のどちらも使わない」と回答した人の割合は、年齢が若くなるに従って高くなる傾向にあり、20代では1割弱、16～19歳では1割台半ばとなっている。



(3) (a)的を射る／(b)的を得る

全ての年代で本来の言い方である(a)「的を射る」を使うと答えた人の割合が、本来の言い方ではない(b)「的を得る」を上回っている。中でも、16～19歳では、(a)を選んだ人が7割を超えている。(a)と(b)の差は、30代で3ポイント、40代で6ポイントで、他の年代に比べると小さい。

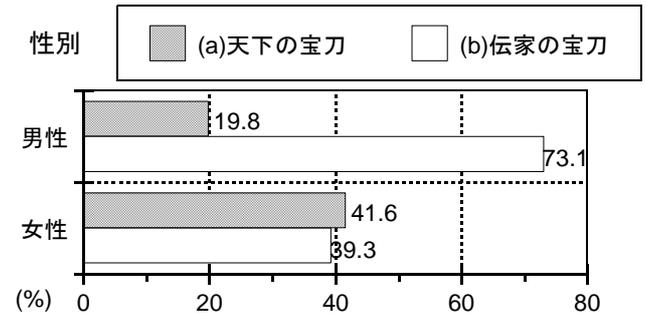




(4) (a)天下の宝刀／(b)伝家の宝刀

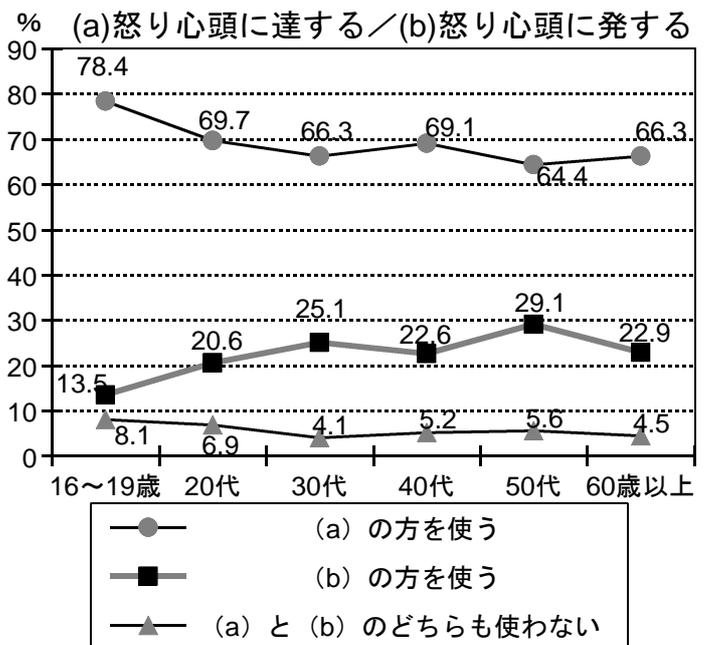
全ての年代で、本来の言い方である (b)「伝家の宝刀」を使うと答えた人の割合が、本来の言い方ではない (a)「天下の宝刀」の割合を上回っている。60歳以上では、(a)「天下の宝刀」が4割弱となっており、他の年代に比べて高い。

また、性別で見ると、本来の意味である「伝家の宝刀」を選んだ人は男性で7割を超えているのに対し、女性では4割弱と「天下の宝刀」を選んだ人の割合を下回っている。



(5) (a)怒り心頭に達する／(b)怒り心頭に発する

全ての年代で、本来の言い方ではない (a)「怒り心頭に達する」を使うと答えた人の割合が、本来の言い方である (b)「怒り心頭に発する」を大きく上回っている。



〔過去の調査との比較〕

過去の調査 ((1)～(3))は、平成15年度、(4)は16年度、(5)は17年度の結果と比較すると、右のグラフのとおり。

経年の調査である五つの慣用句について、本来の意味を選択した人の割合を、過去の調査結果と比較すると、右のグラフのとおり。(ただし、「伝家の宝刀」「怒り心頭に発する」については、過去の調査と今回調査とで尋ね方が変わっている点に注意する必要がある。)

五つの慣用句全てで、本来の意味を選択した人の割合が増加している。中でも、「的を射る」と「伝家の宝刀」は14ポイント、「怒り心頭に発する」は10ポイント増加している。

